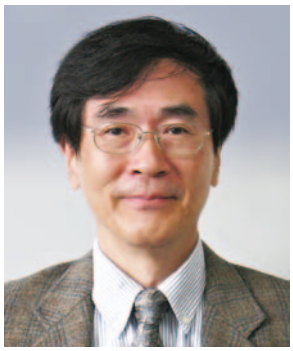
巻頭言

我々はどこからきて、どこに行くのか？



玉川大学 脳科学研究所長
小松　英彦

我々はどこからきて、どこに行くのか？　この質問は高度な知性を獲得した我々人類が、望むと望まざるとにかかわらずいだくことになった問いです。古今を通じて哲学者、芸術家、科学者たちが、それぞれにこの問いに答えを与えようと努力し、先人の答えの上に自らの答えを積み重ねてきました。私たち人類は素粒子や原子、分子といった物質から成り立っており、物理の法則に従って形作られ機能しているはずです。また宇宙の歴史の中で、ある時に生み出された生命が、進化を積み重ねてきた道の端に人類は立っているはずです。ですから、「我々はどこからきたのか？」と問う時に、宇宙や生命のことを抜きにして考えることは不可能です。一方宇宙や生命についての知識だけでは最初の問いについて十分考えることはできないでしょう。この問いには私たちがどのように世界を理解しているか、過去や未来とどうつながっているのか、あるいは何かを感じるというのはどういうことなのか、といった心についての知識が不可欠だからです。現代の社会ではかってないほど脳科学への期待が高まっています。その背景には社会での経済活動に脳科学の研究方法や成果が生かせるのではないか、という期待や、増え続ける認知症や脳神経疾患を治療し予防するために脳研究の発展が強く求められているといった社会的要請があります。そのような現実的な期待に応えていくことはもちろんとても重要です。しかしもう一方で、脳科学に携わる者は、「我々はどこからきて、どこに行くのか？」という人類の普遍的な問いに向き合うことを忘れるべきではありません。その答えを求めていく過程で、人類は自らについての理解を深め、自然環境や社会との関わりをより深く知ることになるでしょう。そのような知の積み重ねこそが、最も本質的なところで長期的に社会に貢献すると信じているからです。玉川大学には人間や生命や物理に関わるさまざまな学部や研究所があり、色々な角度から「我々はどこからきて、どこに行くのか？」という問題に直接あるいは間接的にアプローチしています。このような学内のさまざまな分野の研究者、あるいは学外の研究者と交流を深め、広い視野に立って研究を見つめ直す中から、脳科学に新しい地平を切り拓く研究が生まれてくるものと期待しています。